西日本新闻 文化版

1988 年九月二十六日~十月八日

终究孤身一人 独自奔赴孤独

反对单人垂钓

作为备受瞩目的画家兼作家，菊畑茂久马每当谈及九州派时，表情与语调便变得复杂起来。

那曾是群心肠软的人。尽管争执激烈，但也有樱井孝身（法国）替缺钱者垫付会费，大山右一（福冈市）购买作品援助等善举。“将朋友之事视如己出的群体，对我这个天涯孤儿而言就是桃源仙境”。他在其中尽情挥洒。“他们拯救了濒临崩溃的我”，他怀念道。

然而人间桃源岂能长存？他屡次与那些重视运动而压制艺术必需的个人创造力的前辈发生冲突。“集体至上”“东京攻略”——纵使嘴上这么说，但评论家一到场，谁都难免想出风头。一旦有人抢了风头，人际关系便开始紧张起来。

菊畑被东京画廊“单挑”中选。他与当代艺术界最具实力的南画廊签约。此事招致同伴反感，最终他脱离九州派。“那段青春也算凄惨”。自此，他开始闭门独居。

大受欢迎的《奴隶谱系图》

在 1961 年东京国立美术馆举办的“三十六年的现代美术实验”展览中，菊畑以将五日元硬币密密麻麻钉满圆木、地面也撒满硬币的作品《奴隶谱系图》震惊了整个美术界。次年 1962 年，他在南画廊首次个展上推出了圆形的《奴隶谱系图》。有收藏家竟购入十余件镶嵌假牙与义眼的诡异作品，堪称大获成功。

1964 年第二回展览呈现“轮盘”系列。原色油漆如旭日般放射状扩散的轮盘，被誉为日本波普艺术的典范。然而在创作巅峰之际，他却在之后十九年间未再举办绘画个展。

当时正值万国博览会前的经济增长期。“我意识到欢快煽动投机心理的轮盘画作不过契合时代而已，这并非我本真的绘画”。当创作变得矫揉造作时，他便无法开拓新境。为探寻“自我创作的本质”，他闭门潜心于工作室，与画廊渐行渐远。

对作兵卫翁心服口服

1970 年成为东京美学校讲师。这所学校由一位出版社社长在大学抗争浪潮中创办，旨在打造理想大学。在这里，他让学生临摹被称为筑丰炭坑画师的山本作兵卫(1984 年逝世，享年 92 岁)创作的纪实画作，最终完成了高 3 米、宽 20 米的大型壁画。

作兵卫是位六十多岁时突然开始凭记忆作画的前矿工。菊畑对这位从未考虑发表、仅凭笨拙笔触创作千余幅作品的老人心生敬佩。或许是对那个被热潮裹挟、被名利冲昏头脑的时代的反思吧。作兵卫脚踏实地追寻自我的姿态，让菊畑初次感受到“此人正是我绘画的导师”。

与此同时，他出版了以战争直观体验为主题的《藤田啊，安眠吧》(1972 年)与《天皇的艺术》(1972 年)，并在此基础上推出《战后美术的原质》(1982 年)。他试图重新审视日本近代美术的结构，并其中定位作为面家(注:指以面部为创作核心的画家)的自我。

仅凭平面展开较量期间，

他持续创作了无数素描，制作了上百件立体作品。并非为了展示，而是为了追问“我的本体究竟是什么”。最终诞生了《天动说》系列——在画布上嵌入木棒与布料，反复涂抹油彩与蜂蜡混合的浓郁灰调。这是平面与立体的融合。1983 年在银座东京画廊展出。时隔 19 年的个展大获成功，他称之为“从彻底死亡中重生”。孤独奔跑的历程获得认可，创作新作品的热情油然而生。不久后，“天动说”系列中嵌入的物体逐渐消失，画面只剩颜料与蜂蜡。自九州派时期高呼“反绘画”拒绝平面创作以来，他始终执着于立体装置，如今终于拥有了仅凭平面创作一决胜负的自信。更深邃的灰色亦逐渐消退，画面蜕变为泛着水蓝的《月光》系列及未公开的《月宫》系列。″年过半百，该臻于圆熟了。终究不过是孤身一人。在孤独中奋力前行。跌倒时，要优雅地消失，不必手忙脚乱。″

北九州市立美术馆将于 11 月 15 日举办“菊畑茂久马展”。这场回顾展包含未公开的立体作品。或许能在展厅里窥见这位断言“正在举办的九州派展览，对孤独的我毫无触动”的艺术家，其心灵轨迹的印记。

前衛たちの軌跡

九州派から四半世紀

〈9〉

所詮一人 孤独の身で突っ走る

菊畑 茂久馬（53）〈福岡市〉

一本釣りに反発

中央に注目される画家で、文筆活動もする菊畑茂久馬は九州派の話になると表情や口調が複雑に変化する。

心優しい人々の集まりだった。激しいけんかとは裏腹に、金がない人の会費を立て替えた桜井孝身（フランス）や作品を買って援助する大山右一（福岡市）らもいた。「友のことを自分の事として受け止め合う集団は、天涯孤独だった僕には桃源郷だった」。この中で奔放にふるまった「崩壊寸前の僕を救ってくれた」と懐かしむ。

だが、この世で桃源郷が長く続くわけがない。

運動を重視して、芸術に不可欠な個人の創造性を抑えこむ先輩と衝突を繰り返す。

「集団だ」「東京攻略だ」と口にしても、評論家がくれば、とかく自分が目立ちたがるのが人情。だれかが目立てば人間関係もぎくしゃくとしてくる。

菊畑は、東京の画廊の"一本釣り"に掛かった。現代美術で最も力があった画廊と契約したのだ。これが仲間の反発を買い、結局、九州派から離れる。「無残な青春でもあった」と言う。以来、孤に閉じこもることになる。

大当たり「奴隷系図」

三十六年の現代美術の実験展（東京国立美術館）で、丸太に五円玉をびっしり打ちつけて床にも硬貨をばらまいた作品「奴隷系図」で美術界をあぜんとさせた菊畑は、翌三十七年には南画廊での初個展で円形の「奴隷系図」を発表。入れ歯や義眼を埋め込んだ気味悪い作品を十点ほども買ったコレクターもいて大当たりだった。

三十九年の第二回展は「ルーレット」シリーズ。原色のペンキが旭日のように放射状に広がるルーレットは、日本のポップアートの典型とまで評された。が得意を極めていながら、なぜか、その後十九年間も絵画の個展はしていないのだ。

万博を前にした経済成長期にあった。「陽気で射幸心をあおるルーレットが時代に合致したに過ぎないと感じた。僕本来の絵ではない、と思った」。しらじらしくなって新たな展開はできなかった。そして「自分自身の仕事」を探るためにアトリエに閉じこもり、画廊とも疎遠になっていった。

作兵衛翁に心服して

四十五年には東京の美学校講師になる。大学紛争の中で、理想の大学を目指した出版社社長が造った学校である。ここで、筑豊の炭坑絵師と呼ばれた山本作兵衛（五十九年、九十二歳で没）が描いた記録画を生徒に模写させて高さ三メートル、横二十メートルの大壁画を完成させた。

作兵衛は、六十代半ばから突如として、記憶を頼りに絵を描き始めた元坑夫だった。発表などは考えもせずに、たどたどしい筆で千枚以上も描いた作兵衛に菊畑は心服した。熱気にはやり、人気に浮かれた時代への反省もあったろうか。作兵衛の、コツコツと自分を追いかける姿勢に、生まれて初めて自分の絵の師だと感じた。

一方で、戦争画を主題にした「フジタよ眠れ」（四十七年）「天皇の美術」（同）を出版、その延長にある「戦後美術の原質」（五十七年）を出す。日本の近代美術の構造をとらえ直し、その中での画家としての自己を位置づけようとしたのだろう。

平面だけで勝負

その間、デッサンを無数に描き、オブジェを百個以上作り続けた。見せるためではなく「自分の本体は何だ」と問うためだったという。

やがて、カンバスに棒や布を埋め込み、油彩と蜜蠟（みつろう）を混ぜた濃いグレーを何度も重ねた「天動説」シリーズが生まれる。平面とオブジェの合体だった。五十八年に銀座の東京画廊で発表。十九年ぶりの個展。大成功で「完全な死から、生まれ変わった」。孤独の身で走ってきたのが認められ、次の仕事への意欲がわきあがってきた。

やがて「天動説」のシリーズから、埋め込んでいた物体が消え、絵の具と蜜蠟だけの画面になる。九州派時代に「反絵画」を叫んで平面を拒否して以来、オブジェにこだわってきたが、平面だけで勝負する自信ができた。さらに濃いグレーも消え、水色がかった「月光」、未発表の「月宮」のシリーズへと変容している。

「もう五十代半ば。円熟せならん。所詮（しょせん）は一人。孤独の中で突っ走る。コケたときは、バタバタせずに消えてみせる」と思う。

北九州市立美術館が十一月十五日から「菊畑茂久馬展」を開く。未発表のオブジェも含めた回顧展。開催中の九州派展を「孤の自分には何の感興もわかない」と言い切る男の、心の軌跡がそこで見られるかもしれない。

＝敬称略＝終わり

（吉田浩記者）

九州派展　10日まで、福岡市中央区大濠公園、福岡市美術館。

「円熟をめざす」と語る菊畑茂久馬さん